

資料渉猟余話

その51

日夏耿之介の『小説 新訂版 自伝 竹枝町 竹枝町巷談』は、昭和31年4月に的場書房から「明治調和装特別 単行本や文庫本として刊行され、その後、昭和53年に完結した河出書房新社版『日夏耿之介全集』の第8巻に

「小説」として収録されている。また、黄眠先生の甥に当たる松岡耿介が、先生の23回忌に何か残そうと、黄眠先生自身が書き入れ（校正）をした的場書房本を底本に、河出書房新社や、自身が参加した読書会などの知見を盛り込んだ『増補

加えて、的場書房版300部という少数ながらも災いして認知度が低く、したがって高価で、郷土の人でも読む人は少ないようだ。が、しかし、この本は、黄眠先生12歳から13歳頃(明治34〜35年)

黄眠先生が行く 9

『竹枝町巷談』の書誌

嶋 不 濁

の飯田の町を主な舞台にしたノスタルジックな日夏版「たけくらべ」母を恋うる記」であって、丁寧に読めば、黄眠先生の愛した、今はなき飯田の町が彷彿としてくるばかりでなく、樋口家を中

心には、樋口家に繋がる座光寺掛野北原家や鼎の中島家、若松屋林家、安東欣一郎、柳田直平・國男・日榮萬之助・羽生永明・樋口龍峽・島崎春樹・北原阿智之助など伊那谷の歴史や文化に繋がる、興

味あるさまざまな人物が仮名ではあるが登場しているのである。出版時この本に挟まれたチラシ「巷談由来」によれば、この原稿は「昭和二十年乙酉十二月、兵火を避けて信州飯田に通れたる

山河の譬、すずろに心魂に徹して寂しさや方なきがまま、わが稚なき、此の追憶に仮染の小説の形撰りて(中略)み閑なる余り日夜筆を可し、さて二十日許りにして了へたりし

旧の文屋が篋中に眠りたるが、此度志ある書坊出て古き浮世の紙型を其まま採り用ゐて世に出るゆくりかの運びとはなりしなれ」とあり、10年前の原稿が陽の目をみる喜びを「戯



的場書房版『竹枝町巷談』

原稿譲渡の経緯を書き記した。そこには「この草稿が将来の飯田の文運隆盛の母体となることと先生の詩魂をそ

巡り巡って、今、美術博物館に収蔵されることになったこの黄眠先生の原稿は果たして「飯田の文運隆盛の母体」となり得ているのだろうか？ もつすく

6月13日。44回目の黄眠である。